

2020年度 SYLLABUS 【博士前期課程】

授業科目名：金融機関論特論	
担当教員名：國方 明	
<p>授業科目概要：</p> <p>本科目の目的は、次の2つである：(a)金融機関に関わる経済理論を修得する、(b)金融機関に関する実証分析の手法を修得する。それぞれ補足説明すると次の通りである。</p> <p>(a) ミクロ経済学の理論によると、金融機関の役割は市場の失敗(特に情報の非対称性)を解決することだと説明される。まず、この役割に関する経済理論を説明する。次に、規模の経済性、範囲の経済性、効率性という概念を使って、金融機関がこの役割を果せる根拠を考察する。</p> <p>(b) 規模の経済性、範囲の経済性、効率性は、金融機関の費用関数などの推定を通じて分析される。この分析手法を紹介する。また履修者に現実の銀行のデータを配布する。学期末までにこのデータを加工して、規模の経済性や範囲の経済性に関するレポートを作成してもらう。</p> <p>なお金融業は大きく銀行業、証券業、保険業などに分かれる。本科目では銀行業(預金取扱金融機関)を中心に話を進める予定である。</p> <p>最後に、本科目では教科書を使用せず、下記参考書に基づいたハンドアウトを配布する。</p>	
履修上の留意事項：	
<p>あらかじめ、金融経済学特論、ミクロ経済学特論I、ミクロ経済学特論IIおよび計量経済学特論の単位を取得していることを強く望む。もし、これら科目の単位を取得していなければ、各科目のシラバスで指定されている教科書などを使って自習すること。</p> <p>表計算ソフトと計量パッケージの基本的な使用方法を知っていると、(b)を円滑に理解できるだろう。</p> <p>最後に、第8回以降で、細かく、余り体系だっておらず、誤解を恐れずに言えば「泥臭い」作業を紹介する。担当教員は、このような作業を厭わない学生の受講を望む。</p>	
教科書・参考書	
<p>参考書1</p> <p>書名：『金融』</p> <p>著者／編者：内田浩史 著</p> <p>出版社：有斐閣</p> <p>出版年：2016年</p> <p>金融取引や金融機関を、ミクロ経済学の理論(特に不完全情報の経済学や不完備契約の理論)を応用して説明している。学部レベルのテキストだが、経済学を使って金融を理解するための手がかりとしてふさわしいと考える。</p>	<p>参考書2</p> <p>書名：『金融論』</p> <p>著者／編者：大野早苗 他 著</p> <p>出版社：有斐閣(有斐閣ブックス)</p> <p>出版年：2007年</p> <p>金融についての包括的なテキストである。金融にかかわる様々な論点を概観するのに役立つだろう。但し、出版年が古く、章の間で難易度が大きく異なる。</p>
<p>参考書3</p> <p>書名：『新しい金融理論』</p> <p>著者／編者：酒井良清・前多康男 著</p> <p>出版社：有斐閣</p> <p>出版年：2003年</p> <p>参考書1と同様に、貸出や預金の機能をミクロ経済学の理論を応用して説明している。参考書1よりも厳密な点と、決済システムの理論が充実している点が特徴と言える。</p>	<p>参考書4</p> <p>書名：『日本の金融機関経営』</p> <p>著者／編者：粕谷宗久 著</p> <p>出版社：東洋経済新報社</p> <p>出版年：1993年</p> <p>日本の銀行を対象とした実証分析をまとめている。この授業の後半で、この本で採用されている分析手法やより新しい手法を教える予定である。</p>

<p>評価方法及び判定基準： 次の(ア)～(ウ)を総合して、100点満点で各履修者を評価する。 (ア) 授業への参加や貢献 (イ) 課題1回 (ウ) 学期末レポート</p> <p>上記(ア)～(ウ)の内容及び配点を、第1回授業内で伝える。</p> <p>A評価：80点以上、B評価：70点～79点、C評価：60点～69点、F評価：59点以下</p>
<p>授業目標及び進め方： 目標は概要で示した通りである。 進め方は講義による。下の授業進行計画を参照してほしい。</p>

◆ 授業進行計画 (* 受講生の関心分野、講義の進度に応じて、一部内容を変更する可能性がある。)

第1回 ～ 第3回	<p>テーマ：金融機関の概観 内 容：金融機関の歴史や財務諸表の特徴を説明する。 教科書／参考書：参考書1第8章および第10章、参考書4第2章。</p>
第4回 ～ 第7回	<p>テーマ：銀行業にかかわる経済理論 内 容：銀行の行動を分析する経済理論と、銀行が提供する貸出や預金にかかわる経済理論を紹介する。 教科書／参考書：参考書1第3章～第8章、参考書3第1章および第2章。</p>
第8回	<p>テーマ：銀行業を対象とする実証分析の手法(1) 生産物と生産要素 内 容：第7回までの授業で、銀行の果たす役割、言い換えれば銀行が提供するサービスを説明した。そして実証分析に当たって、このサービス生産・提供度合を各銀行の財務データ等で測らなければならない。但し、サービスの生産・提供度合をどの財務データで測るかについて、いくつかの学説があつてコンセンサスが得られていない。ここでは代表的な学説を2つ紹介したい。 教科書／参考書：参考書4第3章～第5章。</p>
第9回 ～ 第13回	<p>テーマ：銀行業を対象とする実証分析の手法(2) 生産関数と費用関数 内 容：ミクロ経済学で学んだ生産関数や費用関数の議論を応用して、規模の経済性と範囲の経済性を分析する方法を教える。また生産関数や費用関数を利用して、金融機関の効率性を分析する手法も教えたい。 教科書／参考書：参考書4第3章～第5章。</p>
第14回	<p>テーマ：生産関数・費用関数の推定方法 内 容：生産関数や費用関数を、計量パッケージで推定する方法を説明する。また銀行にかかわる情報源についても教えたい。 教科書／参考書：参考書4第3章～第5章。</p>
第15回	<p>テーマ：レポート作成の指導 内 容：学期末レポートを作成するための指導を行う。 教科書／参考書：該当無し。</p>